

わが器たち

江国 千春

器には全く興味がなかった。食器棚には義母と母からもらい受けた食器しかなく、どんな器で食べても味は同じだと思っていた。

数年前に体調不良だった時、岡山城で陶芸体験をした。土に触れていると無心になれる。自分の手でもっと上手にいろんな作品を作りたいと思い、陶芸教室に入会した。

初めはシンプルなどんぶりや湯飲み、角皿、花入れなどを作った。そのうち模様や絵付けにも挑戦するようになった。夜空と猫の後ろ姿を描いた湯飲み。庭のラベンダーを摘み取り、白地に青の濃淡で描いたサラダボール。三つ編みの取っ手付きのペン立ては天目、わら灰、あめ釉（ゆう）と3個作った。

どこにいても壁の模様や器の形が気になるようになった。近所のカフェのカップの模様をペーパーナプキンに書き写した。それを見ながら筒状に整えた土を針でくりぬいて灯籠を作った。

昨年の2月、ふと酒器を作ろうと思った。新しい年を自作の酒器で優雅に迎えたかった。ふつくらとした徳利（とくり）に3カ所窪みをつけ、濃い緑で2枚の葉をささっと描いた。3個の盃も口にゆがみをつけ、それぞれ松、竹、梅を描いた。思ったより大きかったので、次回は土を替えて少し小さめな徳利と盃を作った。

「大きい徳利は旦那さん用で、小さいのはあなたね」

隣でロクロを回しているKさんがつこりとほほ笑む。

食器棚の半分は自作の器に替わった。朝食は茶色の土にわら灰の

釉薬がかかった角皿にトーストを並べる。ラベンダーの器にヨーグルトと果物を入れ、そば釉がかかったマグカップでコーヒーを頂く。至福の時間だ。

自作の器は自分の子どものようにかわいい。あちこちに飾り眺めるのもいい。頭の中で描いた物が3次元の作品に仕上がる工程が楽しい。

昨年の5月、教室に通えなくなった。県外の実家に住む母の介護が必要になったからだ。焼いたままになっていた新作を教室に取りに行けたのは、新年を過ぎた3月だった。

久しぶりに我が家に戻ってきた私の酒器たち。

「やっと帰ってきたね」愛（いと）しくて陶肌を何度もなでた。黄瀬戸の徳利わが。松竹梅の盃はちよつとへたくそな筆使いが素朴でいい。

母も元気になり、来年の令和の元旦には、笑顔で乾杯できればいいな。

作者 江国千春

題名 わが器たち

山陽新聞夕刊

2019.6.20 掲載